【別冊第3号】 2014.4.30発行

DRAMAかながわ 別冊3号

ＤＲＡＭＡかながわに“僕らの演劇”という劇評を載せるページがあります。神奈川県演劇連盟加盟劇団をお互いに鑑賞し親睦を深めるとともに、より良い芝居創りに活かす目的で評価しています。今回、ＤＲＡＭＡかながわ別冊として多くの劇評を一冊にまとめることにしました。秋から冬にかけて各劇団は一年の集大成として数多くの作品を舞台で行っています。連盟加盟劇団の舞台をＤＲＡＭＡかながわで振り返っていただきたいと思います。

第十一回 神奈川県演劇連盟合同公演

「安楽兵舎　V･S･O･P」　劇団よこはま壱座　作：ジェームス三木　演出：濱田 重行

2013年12月13～15日　神奈川県立青少年センター　ホール

文：劇団「横綱チュチュ」　鈴木 みな

たびたびお邪魔する劇団よこはま壱座の年末興行。今年の憂さを吹き飛ばしましょう!!のつもりで伺った。

冒頭からよくぞ集まったと、いぶし銀の面々。個性も際立っている。時々聞こえないのは自分も耳が遠くなったのか？もう少し前に座ればよかったか。などと思いながら、やや長めの兵士たちの経歴を聞く。

この国の法律が変わり自衛隊に入れるのは７０歳以上だけになった。条件は年齢だけで、病気でも痴呆でも、寝たきりでも、国が最後まで面倒を見てくれるというシステムだ。行き届いた栄養管理で糖尿病などの病も改善してもらえる。さすが壱座、キャストは申し分ない。ジェームス三木なかなかオツなことを考えるものだと、楽しく始まった。

舞台は糖尿病部隊が中心で、そこに女性部隊、防衛省広報課長、厚労省派遣の医師、２名の看護師さん、ストリッパーのお姉さんたちとにぎやかに展開した。

ところが、二幕目になると事態は一転。戦地に元気な人は出兵することになった。辞める人もいたが、皆やる気満々だ、それにしても最近この兵舎ではもめ事が多い。疑問に感じた担当医師が「秘密」を知ってしまい、出兵前夜に兵舎に告げに行く、同席する恋人の防衛省広報官。食事のカルシウム量を著しく減らすことによって、全員が闘争的にされてしまっていること、政府の企みで戦争をでっち上げ、人口増加や高齢化で悩む各国が共謀し同じ作戦で集められた兵士たちを、爆弾で一掃するという計画だと打ち明ける。

不穏な動きはすぐ察知され、医師が撃たれ怪我をし、なぜか立てこもりを余儀なくされ包囲されてしまう。その後は兵士・看護師と続けて銃弾に倒れてしまい、舞台は緊迫する。やたらに響く銃声。

この辺りで疑問を感じたのは、兵士が殺されたこと、民間の看護師が殺されたこと、同じような扱いで「これでいいのか？」と思った。目の前で人が殺されたことについての反応があまりにも稀薄だったと思う。

途中からは「特定秘密保護法案」について考えながら観ていたが、最後の終わり方を観てしまうと、衝撃的過ぎて政治的な思いは薄れてしまった。できれば冒頭の展開よろしく、笑いの中で見つける危険性というのを観たかったかな。微かな望みは最後に残った看護師だ、すべてを知ってどう生きていくのか期待したい。

劇団やぶさか

「眠りの森～Girl's Side Adventure～」

作・演出：海老原 あい

8月7日～10日　於：黄金スタジオ八番館

「こんな所に芝居のできる場所なんてあったっけ？」という思いで会場に向かうと、やはりそこは芝居ができるようなスペースではありませんでした。一応客席と舞台はなんとなくエリアが分かれているものの、柱だらけの空間でした。細い柱とは言え、こう何本も立っていて大丈夫なんだろうかと心配しましたが、芝居が始まってしまうと全く気になりませんでした。むしろその何本もの柱がとても効果的に使われていました。舞台は森の中という設定でしたが、木々や草花などの飾りこみは一切しておらず、必要最低限の小道具（持ち道具）しか出てきません。なのに「森の中」いる感じがして、とても不思議な空間でした。

ストーリーは、魔法をかけられて森の中にある塔に幽閉されている女の子が、森の中で王子様と出会い、さまざまな困難を乗り越えていくというファンタジー。劇団やぶさかが得意とする世界が、今回も盛りだくさんでした。女の子の行く手を助けているのかいないのか（いや助けているんだけど）、森の住人たちがかわいらしかったです。

住人と言っても人間ではなく、長いつき合いの友達みたいなユーレイや小動物たち。ただかわいらしいのは良いのですが、かわいらし過ぎて、それぞれのキャラクターが際立っていなかったのが惜しかったです。年齢の近い女子が演じているのでどの役も同じように見えてしまうのは仕方ないのかもしれませんが、だからこそもっと差別化した方がもっと面白くなったと思います。

同じように魔女も徹底的に意地悪だとか、ものすごい悪の力を持っているとか、もっともっと悪役にした方が、見ている私たちは話しに引き込まれます。悪役の本領発揮は次の「王子編」に期待したいと思います。

それにしてもあのハンデだらけの空間で、役者たちはよく動いたと思います。途中踊りのシーンもありましたが、柱や役者同士がぶつかる事なく、役者たちは絶妙のバランスでスムーズに動いていたのには感心しました。相当練習をしたのではないでしょうか。「狭い」「柱だらけ」「異常に暑い」ハンデだらけの空間での芝居でしたが、それだけに見る方も演る方もとても印象深い公演だったと思います。次回は「恵まれた」芝居空間の相鉄本多で続編を上演するとのこと。伏線の謎もそのままなので、ぜひ見に行きたいと思います。

劇団よこはま壱座　熊谷浩子

まりこ☆みゅーじあむ 朗読"おはなしころころ"VOL.13

「あそびば～創って観よう!～赤ずきんちゃん・ヘンゼルとグレーテル・三匹のこぶた」

構成・脚色・演出：川井 眞理子　　8月31日　於：相鉄本多劇場

本作は、相鉄本多劇場提携のファミリーシアター。朗読劇と聞き「つまり子供向けの作品？」「大人でも楽しめる？」と、少々訝しみつつ足を運んだのですが、良い意味で予想を裏切られる公演となりました。
開演時間になり、お揃いの橙色のTシャツを着たメンバーが登場。サアお芝居が始まる…かと思いきや、その前に、まずは皆でウォーミングアップ!?大きな人参のクッションを客席で投げ合う＜にんじん爆弾、お口の体操の＜言葉遊び…等など、大人も子供も「観客」ではなく「参加者」となり自然と全員が参加してしまうこの〝ウォーミングアップ”はシアターゲームのようで、会場の一体感を生み出すのに一役も二役もかっていたように思います。

そうして、いよいよ朗読劇が始まります。演目は、誰もが良く知るグリム童話三本。朗読劇の最中も、生演奏の音楽や効果音と共に、ワクワクするような仕掛けが随所に施され、既知のストーリーながら、どのお話も飽きずに最後まで観る事が出来ました。

また、この公演の最も特筆すべき点は、子供達による「工作の時間」が朗読劇の合間にあるところでしょう。舞台上に用意されるのは段ボール・布・紙・クレヨン・糊・鋏…etc.数々の道具を使い、あらゆる＜お菓子を子供達が自由に創っていくのです。そうして、皆が創ったそれぞれの創作菓子は、そのまま＜お菓子の家の大パネルに貼り付けていき、完成した大パネルは、次の朗読劇『ヘンゼルとグレーテル』の背景となります。『あそびば～創って、観よう！～』の公演タイトルに、合点がいった次第です。

個人的に、子供向けと銘打った公演は、実はとても難しい舞台だと思っています。子供は飽きやすく、また正直な

ので、少しでも面白くないと思ったら、ジッと観劇し続けることは出来ません。役者が子供を巻き込もうとしても、よほど上手くやらない限り、往々にして失敗するのがオチでしょう。要は、誤魔化しも甘えもきかないというのが、子供向けのステージ…という印象ですが、しかし、それも視野に入れたうえで「とにかく子供達に楽しんでもらおう！いや、楽しませるぞ！」という、作り手の熱意を、本作では感じる事が出来ました。

この『お話ころころ』は、ＫＡＡＴ公演含め、過去何回も上演されてきたシリーズということで、長く続けながら試行錯誤を繰り返してきた成果もしっかり出ていたと思います。溢れる沢山のアイディアに脱帽しつつ、後日、来場御礼葉書を送って頂いた点も含め、大変好感の持てる公演でした。

小さなお子様の居るお母様達にも、安心して勧められる公演です。地域に密着しつつ、是非これからも長く続けていってほしいと思います。

劇団やぶさか　海老原あい

緑慎一郎とミユキーズ

「蝿取り紙」

作：飯島 早苗、鈴木 裕美　演出：笹浦 暢大

9月13日～15日　於：神奈川県立青少年センター多目的プラザ

最近、劇場で貰う公演チラシ全てに名前が載っているのではないかと錯覚するくらい、大活躍の笹浦暢大氏と緑慎一郎氏。そんなお二人が今度は緑慎一郎とミユキーズプロデュース公演で「蝿取り紙」をやるという。あらすじは「ハワイ旅行に行く両親を見送るために集まった山田家の５人兄妹。出かけたはずの母が、翌朝家にいた！どういうこと！？」と面白そう。調べるとフジテレビの「演技者。」でも取り扱われた有名作らしい。

期待して青少年センター多目的プラザの右端へ着席。見渡せばほぼ満席で人気ぶりが窺えた。明かりが点くと舞台上にはリアルな装置が姿を現す。空間を最大限に使い、柱を挟んで、右にダイニングルーム、左に和室の居間が作り上げられていた。

しばし見とれるのも束の間、テンポよくお話が進んでいく。上演前のアナウンスでは「２時間１０分を予定しています。寝ないでください」と予告兼お願いをされたが、面白い本と魅力ある芝居のおかげで、アナウンスのお願いに応えることができた。

印象的だったのは会場全体が心動かされている雰囲気を感じ取れたこと。座組一同が奇妙な設定を真実味ある物語として伝える仕事をした成果であろう。長男を演じた田中勝彦氏は、立体感ある発声と抑揚ある芝居で笑いの中心となっていた。三姉妹を演じた岡本みゆき氏、伊藤南咲氏、山本悦子氏の掛け合い。末っ子緑氏の可愛がられぶり（もしくは雑な扱い）。織田裕之氏の思わせぶりな存在感。家

族に波乱をもたらす母親を軽妙に演じた稲垣美恵子氏。とプロデュース公演ならではのアンサンブルが楽しめた。

全体の完成度が高く、幅広い世代を取り込める演劇の素晴らしさがあった。本公演の中心となった世代には神奈川県の演劇を盛り上げる希望のような目標のような存在になってもらえればと思う。

最後に気になった点を二つ。３姉妹が競いながら和室側の廊下にあるトイレへ行くシーン。わざわざ和室からダイニングルームを通って廊下に出るだが、和室の奥の襖が開いているのだから、そこから出ればいいのにと思ったけれど、どうやら和室の奥は襖ではなくて、廊下での芝居を見せるための「透明な壁」という趣向だったようだ。他の部分がリアルに作られていたのでわかりづらかった。そして手前にあった柱。この柱によって、いくつか見えづらい場面があった。和室で５人兄妹が母親の言葉を神妙に聞く大事なシーンで、役者の表情が隠れてしまったのが残念だった。

劇団かに座　金野克行

風雲かぼちゃの馬車

「超能力裁判」

演出：土井宏晃　作：重信臣聡

9月２１日～２３日　於：下北沢シアター711

歌って踊って人を斬る！風雲かぼちゃの馬車のサイキックサスペンス。

超能力を持つ被告が超能力で恋人の首を曲げて殺した。そんな裁判に集まった裁判員のお話し。

今回はまさか歌って踊って人を斬らないのか！？と思ったが歌は歌った。せりふ芝居なだけにより、つかっぽいと言うかこれはもはやかぼちゃっぽさで、役者達にもしっかりと

それが染込みそれぞれが魅力的に舞台の上で観客に訴える。

物語も魅力的で、次から次に裁判員達にも秘密があったりするのがドラマチックに解けて行くのにドキドキさせられる。

ここの所公演回数の多い風雲かぼちゃの馬車だが、重ねる毎にクオリティーは上がり魅力的になっていく。進むために努力を惜しまない姿勢が結果となって現れているのだろう。これからも益々観客の喜ぶ舞台を創り続けてほしい。

織田 裕之

ミュージカルプロジェクト

「劇王神奈川Ⅱ」

１０月１８日～２０日

於：神奈川県立青少年センター多目的プラザ

開演を知らせるドラの音が響き、司会がルールと注意事項を読み上げると、なんだかワクワクしてきたのを覚えています。「観客と審査員の投票によって勝敗を決める」というこの大会に参加するのは、私は初めてでした。ほぼ事前知識のない状態で一体どんなものなかと少々不安ではありましたが、その不安をくつがえす、あっという間の２時間でした。

制限時間は一団体２０分、それが４団体。団体間での舞台転換は数分で済ませられるよう各々工夫されていたのでサクサクと進み、飽きることなく観ることが出来ました。私は二日目しか観劇していないのですが、とにかく参加団体の個性が強かった！　審査員の秋之桜子さんも仰っていましたが、この日は「女子力」と「オッサン臭さ」が入り混じっていて大変面白かったです。全ての上演が終了すると、観客は気に入った一団体を選び投票します。その集計をしている間に審査員による講評会が行われました。審査員の方々の厳しい意見を聞いていると、同じ芝居を観ているのに感じ方がこうも違うのかと衝撃を受けました。こういった機会はとても勉強になります。

そして、この日一番衝撃的な出来事が起こりました。『悪夢くん』の投票結果です。審査員は大絶賛で高得点だったのですが、なんと、観客の投票数は最も少なかったのです。そして観客投票数がトップだった『一閃』が合計投票数でブッちぎりの一位。会場全体が一番盛り上がった瞬間でした。ああ、これが劇王の魅力なのか、と痛感した

瞬間でした。何が起こるか分からないからこそ、それを観客と一緒に楽しむ、という「ナマの舞台」の良さを改めて感じました。

帰り道、初日も観るべきだったな～とかなり後悔しました。全ての団体を観比べたほうが絶対に面白いです。１本の芝居をじっくりと観るのも楽しいですが、こういったスタイルもまた違う楽しさがあり新鮮でもありました。個人的には第三回大会の開催を望んでいます。

そして、参加団体の皆さんお疲れ様でした。楽しい時間をありがとうございました。

劇団河童座　笹木 あゆみ

横浜小劇場

朗読劇「雪窓・だれも知らない時間」

構成・演出：岡崎 多延子、高橋 弘子　１０月１２日・１３日

於：神奈川県立青少年センター多目的プラザ

安房直子作品の朗読劇と聞いて、大変な期待が湧き上がった。「安房直子」の作品と言えば、宮沢賢治の「女性版」のようだと思う。ファンタジー・メルヘンな世界の中に、「生きていて出あう喜び・幸せ・悲しみ・孤独・希望・絶望・夢など様々な事が、そこに起きることに目をそらさず、勇気を持ってしっかり描かれている事がとても

魅力的で、沢山のファンも多い。私事だが、私が数十年前、声優の養成所で朗読を勉強始めたころ、師匠に最初に紹介された本が安房直子作品だった。児童書、あるいは教科書に掲載されている安房直子作品は、優しい文章でありながら、実に深く心に残る。そして、その「優しい」文章の一言一言をどれだけ伝えられるか、作品の感動を伝える難しさを知った作家作品であり、また、沢山の方に知ってもらいたく、読み続けたい、読み伝えたい作家作品なのである。なので、若輩の私が朗読するのとはきっと違うだろうと、小劇場の皆さんの公演が楽しみだった。

舞台は、上・下の袖のパネルと、読み手の座る椅子が並んだだけのシンプルなもの。照明も単サスがそれぞれの読み手にあたるのみ。読み手の持つ台本の表紙は、「雪窓」は雪の結晶が模様になっており、「だれも知らない時間」の台本の表紙は海を思わせる青色だった。それぞれの作品のイメージで、台本の表紙を創るのも、朗読の楽しみの一

つである。舞台同様、衣装もシンプルに黒で統一しており、ナレーション以外のキャラクターの読み手は、例えば亀などはフリンジっぽいデザインの服でイメージを創ったりしていたが、全体的に、朗読劇というよりは、「かたり」を主に置いた、余計なもののないシンプルさを感じた。

さて、「雪窓」は、「雪窓」と呼んでいる屋台のおでん屋のおやじさんとゆかいな狸、不思議な女の子の優しくて、おかしくて、ちょっぴり切ない、でも、じんわりほっこりと、暖かいメルヘンな話。「だれも知らない時間」は長生きしすぎて、生きることに飽きてしまった亀と、生活に追われ思うことが出来ない猟師の良太が出あって起きた、やっぱり切ない、こちらは、ちょっぴりこわい、やりきれない（と、私は感じました）忙しい現代人が亀の時間が欲しいと現実に思うだろう、ドキッとするメルヘンなお話。優しさと厳しさ、希望と絶望、そんな両面を兼ね備えた作品は、シンプルな舞台で、照明の明暗と小劇場の人生を重ねた方々の声が紡ぐことで、成立したと思う。

残念なのは、ナレーターの方が、照明のサスから少々こぼれていたことと、暗いので台本が読みにくかったのか、台本の持ち方が途中不自然だったこと。それでも、小劇場の方々のチームワークは楽しく、舞台上に上がらない方々による袖からかかる掛け声や「歌」などは、物語の進行を盛り立てる。使われた音楽も良かった。

安房ワールドを朗読する人は多いけれど、小劇場の方々には、ずっと読み伝えて頂きたいと思った。『時間があったら、何をするだろう。亀の夢ってどんなだろう、だけど、亀の夢の中に取り込まれたくはないなあ…』とか、『「三角のぷるぷるっとしたやつください」とおやじさんに狸が注文したこんにゃくは、美味しそうだ…』とか。いよいよ寒くなるこの季節、忘れられない作品である。ほっこりと届けてくれた、小劇場の皆さんに感謝。

まりこ☆みゅーじあむ　川井 眞理子

劇団こゆるぎ座

「網」

作:後藤 翔如　演出:楠田 正宏

１０月２６日・２７日　於：小田原市民会館 大ホール

小田原にまつわる歴史的史実を基にした創作劇で、公演の度ごと１０００名の観客席を満席にするという「こゆるぎ座の仕事」を、一度現地小田原で観て見たいという思いを以前からもち続けていたが、ドラマ神奈川誌上の「劇評」を担当にする事になり念願かなって２７日の日曜、小田原に出向いた。

成る程、凄い。開演３０分前だと言うのに一階席はほぼ満席。二階席まで入れて１４００近いホールなので１０００名ほどの市民達が開演を待っているのだ。昨日の土曜日公演もあわせれば２０００名近い人が劇場に足を遅んだ事になる。

なぜ観客数にこだわるのかと言うと、「劇評」と言われる内容はほとんどがドラマの完成度であったり、感想や印象であったり、スタッフの仕事や役者のあれこれであったりで、観客についてはほとんどが無視されていると思われるからである。こゆるぎ座の仕事は小田原に存在する演劇創造団体のひとつに過ぎないのだが、いまや小田原の「市民劇団」と言ってもいい揺るぎない位置を占めているとはいえないだろうか。

演劇は「誰に向かって、何のために発信されるのか」という問いに明快に応えているといって良いだろう。京浜協同劇団も川崎における市民劇の中核をなし、１０年近くにわたって４回実施され観客も３０００名を維持している。と言えば格好がいいが、企画から集客まで主導権は劇団にはなく市の文化財団にある。こゆるぎ座との違いは歴然としているのである。

座長の関口氏はパンフの中でこう述べている。「ひとつの私的集団による文化事業が今日まで脈々と受け継がれている事態は正に稀で、そこそこの成果としてお褒め頂けるかと思っている次第です」と。

「網」の舞台はというと、諸事情により途絶えてしまった鯖の定置網漁。元網元が病身を押して１０年ぶりにその復活のために、男の意地とロマンをかけて挑戦する。雪降りしきる中、大漁の知らせが舞い込むが、網本は…

少しばかりの感想を述べさせていただくと、間口１０間を超える大舞台を使いこなす、苦労が偲ばれた。

座長以下男優陣に比べ女優陣の存在感が薄い。復興、再生は今日大事なテーマ。一人が変われば皆が変わるという視点をさらに深めて欲しかった、と言うのは私の欲か？

京浜協同劇団　藤井康雄

劇団蒼い群

「旅の終わり」」

作：五木 寛之　演出：福本 幸男

１１月９日・１０日　於：横須賀市立青少年会館

蒼い群、第５７回公演、「旅の終わり」の案内状を頂き、すぐ思い浮かべたのは、冠二郎の演歌　旅の終わりの歌詞「流れ流れて、さすらう旅は　きょうは函館

あしたは釧路…」でした。

パンフを見て、五木寛之作と知って、興味がわきました。そして、副題に平成梁塵秘抄劇シリーズと書いてあり、１２世紀、後白河法皇がまとめた当時の歌謡集とのこと。有名な『遊びやせんと生まれけむ　戯れせんと生まれけむ　遊ぶ子供の声きけば　我が身さえこそ動かるれ』で始まるお話とも関係すると思い、ますます興味を持ちました。

舞台は間口が広く、ややもすると劇の密度が薄くなってしまうのが、簡潔な舞台装置と、演技者の熱演でみごとな緊張した劇空間となっていました。劇は、歌があり、音楽ありで暗くなりがちな内容を、緩和して、楽しく観劇できました。

登場人物の一人一人が哀しい物語をもって、一心に生きている。そのために生じる不条理に演歌で慰められ、癒されているようです。しかし、どうにもならない状況でも、それぞれの人が面と向き合って生きている姿に、胸にこみ上げてくるものがありました。また、演者諸氏が真摯に役に取り組まれている姿も、大変良かった。

高円寺ディレクターの演歌に対する情熱と愛情には、ほんものの気迫がありました。しかし、作品を商業ベースに乗せないと、商売にならないので、作者の意図と反する作品となる矛盾に難しい一面をみて、高円寺ディレクターの苦悩が伝わってきました。

人が一心に取り組んだことの真実は、人の心をつなぎ、ほろりとさせられました。

劇団カラーに暖かいものを感じました。カーテンコールのとき客席では、よかったねという声が聞こえました。小生も同感です。

アマチュアで演劇活動は、大変と思いますが、いつまでも続けてください。楽しく観劇できました。ありがとうございました。

横浜小劇場　加藤雄志

演劇プロデュース『螺旋階段』

「カマボ侍と一人の女の話」

作・演出：緑 慎一郎

１１月９日・１０日　於：小田原市生涯学習センターけやき

ここは劇場か、それとも観光地の土産物屋か…そんな錯覚を抱かせるほどに、所狭しと並べられた「ゆるキャラグッズ」…。こいつ（ゆるキャラ）は遅れてやってくる。その名も『かまぼ侍』！！…だそうです。本当によく作りこまれているゆるキャラで、実際に何処かの

地方にいてもおかしくないなと感心ひとしきりでした。竹輪の太刀に蒲鉾の槍、魚をあしらった具足を身に付けた美少年。このキャラはゆるくないッッッ！侍ですからー！…そんなゆるキャラ侍を中心に話は展開します。

経営が傾いた製作所。それでも渦巻くゆるキャラへの愛情、ロマン…。様々な登場人物たちの思惑が、やがて一人のヒーローを呼び覚ます！そいつの名はもちろん、かまぼ侍！こんな侍、現実にも来てくれたらいいな…。いや、いつかは来るさ。だってアイツは遅れてやってくるのだから…そんな、希望を与えてくれる芝居でした。ラインナップが充実したグッズも、ちょっとした旅行気分にさせてくれる…。そんな演出に癒されました。

劇団やぶさか　浅水 真子

劇団かに座

「煙が目にしみる」

作：堤 泰之　演出：田辺 晴通

１１月１５日・１６日　於：関内ホール小ホール

11月１５日、関内ホール小ホールにて、劇団かに座の「煙が目にしみる」を観劇しました。堤泰之の名作ですよね。私自身も二度、演ってます。北見と牧の役で。流石に、創立６０周年を誇る老舗劇団、セットの出来の良さに感心。とある地方の火葬場って雰囲気が、とても良く出来ていた。衣装も秀悦だし、窓の外の桜、その花びらが時折舞い散って、１１月だというのに、舞台は春。劇団の長い歴史が醸し出す、こういう雰囲気は、とても心地良い。

さて、芝居が始まる。歌舞伎や落語同様、名作っていうのは、ストーリーがわかっていても、引き込まれる。冒頭のベテラン男優二人のやり取り。見せますなあ。死に行く二人の心情が、観客の心に突き刺さらず、染み入っていく感じかな。静かな導入部から、対照的な二組の家族が織り成す物語。この話は、演ずる役者のリアリティーが重要と

思う。本公演は役者が実年齢に近い年齢の役を丁寧に演ずる事で、とても身近な、まるで自分の知り合いの家族の話を見ているように感じられた。自由を謳歌し、人生を楽しんできた栄治。その娘と若い愛人。幸恵とあずさの気持ちは、よく出ていたと思う。娘を思うあまり、寂しさを伝え

られない父の気持ち。それがわかっているからこそ、自分と同じぐらいの歳の愛人に対する複雑な思い。よく、表現出来ていました。あずさの居た堪れない、それでいて、栄治を愛した潔さも。小林さんの軽妙な栄治作りの、おかげなんでしょうが。

一方の野々村家も、堅物の煙ったい親父への思いが、上手く演じられていました。馬場さんて、今さらながらですが、芝居お上手なんですね。今回の浩介役は、はまり役でした。いかにも地方都市の高校野球監督って感じが出ていましたものね。礼子、娘、息子。親父の留守の間、お婆ちゃんと楽しい家族だったんだろうなって、想像できました。原田家の夫婦も、どこにでも居そうな、かかあ天下の様子がうかがえました。牧のマッシュルームカットも忠実でしたね。私が、牧演った時は、髪型は勘弁してもらいました。

横須賀の蒼い群に参加していると感じるんですが、ここのお客様も暖かい。純粋に素直に芝居を楽しんでいる。アマチュア演劇は、この全体の雰囲気が大切なんですね。セリフが出てこなくて立ち往生、小道具の忘れ、ちょっとしたミスはありましたが、多分初日のご愛嬌でしょう。さあ、私も再婚はともかく、若い愛人でも作りますか。

H&B シアター　別府 寛隆

劇団河童座

「わしゃ、喰っちょらん!」　作・演出：横田 和弘

11月23日・24日　於:横須賀市立青少年会館

12月7日・8日　於：相鉄本多劇場

この作品は初演から20年、幾度となく再演をしている作品。内容は、元校長先生だったアルツハイマーのおじいさんとその家族のお話。視点を主に家族に置き、家族愛を描いた作品だった。舞台の構造はシンプルな作りになっているためとても見やすく、どんな場面も想像しやすくなっていた。

役者は初演からのオリジナルメンバーがほとんどだと聞く。ギャルでいい加減な長女、しっかり者の次女、アルツハイマーのおじいちゃんと大の仲良しな長男。ストーリーをおもしろく引っ掻き回しながらも、しっかりと進めていく子役を演じるベテランの役者3人。頼りない父、しっかり者の母。この夫婦の関係性がまたいい味を出していた。そしてなんといっても、アルツハイマーのおじいちゃん。見ているこちらもストーリーに引き込まれ、心配してしまいそうになる役に出来上がっていた。

そんな役者たちが個性豊かに演じ、役者一人ひとりが生き生きして芝居をしている姿が劇中の関係性に活かされていたように思える。

最後には感動しほろりと涙する場面もあり、観終わった後、田舎の祖父母に久しぶりに会いに行きたくなるようなそんな心に残る作品だった。

この芝居は老若男女と幅広い年齢層が楽しめる内容なので、今後もまた再演をし、様々な人に見てほしい。

風雲かぼちゃの馬車　亜耶野

劇団横綱チュチュ

「海月～いつか水にかえるまで～」

作：菱倉 あゆみ　演出:団 のぼる

11月23日・24日　於：横浜市磯子区民文化センター杉田劇場

10周年おめでとうございます。

これまで、本公演を4作品（「天ＦＬＹ」「玉虫ブルース」「ＭＡＮＩＭＡＮＩ」「で・き・あ・い」小ＳＨＯＷ公演を1作品「瓜子姫とアマンジャク」観劇させていただきました。初演天ＦＬＹから早10年の歳月が流れたのだ、としみじみ思いました。

共通点は、1．毎回満席　2.家族、子連れのお客様が多い　3．音楽が生演奏　4.温かく誠実な舞台　5.出演者が老若男女世代横断的であり、子どもが出演することも多い。といったところでしょうか。

今回の作品も、期待通り心に沁み通るような舞台でした。海難事故で早逝した同級生や、取り壊される小学校にみんなで埋めたタイムカプセル、久しぶりの同窓会。それらをめぐり、繰り広げられる物語。3つの時間軸（現在、過去、時空を超えた場面）を効果的に展開しながら、終始

温かさに満ちたお芝居でした。役者も、近年老婆役を担うことが多い安次嶺座長以下、安定した演技を見せてくれました。海の家の舞台装置も精巧なつくりだったと思います。満月も幻想的でした。

いつも通り満席の客席。エンディングの万来の拍手。それらは、ホームページに書かれている『心があたたかくなる劇を届け』ていること、『地域に愛される劇団』としての地位を確立していること、を雄弁に物語っていました。

そして、演出の団のぼるさん。銀髪をたなびかせ、客席から勢いよく走ってきてステージに上がり、お客様、出演者に向かって拍手するいつもの光景。毎々、私の琴線と涙腺を揺さぶる一コマ。とても**歳とは思えない若さ。早、川崎演劇塾を卒業して１０年。私も、団さんのような若々しくて素敵な**歳に成れたら良いな、としみじみ思いました。終演後、『団さん、１００歳まで演劇活動を続けてください』とお声を掛けさせていただきました。　訂正。『団さん、１２０歳まで続けてください！』

唯一の心残りは、横綱チュチュの団歌が聴けなかったことである。横綱チュチュの団歌は、優しい歌詞・メロディ・曲を相撲取りのジェスチャーで表現する唯一無二の味わい深い素敵な踊りです。次回は、是非団歌斉唱もご検討いただきたいと思います。

最後に、改めて１０周年記念公演おめでとうございます。劇団横綱チュチュの発展と、劇団員の皆さん及び団のぼるさんの益々のご活躍とを心より祈念いたしております。

劇団川崎演劇塾 なん

ヨコスカ・ベアフット・シアター

朗読劇「私の頭の中の消しゴム」

脚色・演出：三浦 正行

１１月３０日～１２月１日　於：横須賀市立青少年会館

初回を観劇させて頂きました。それぞれの書き手の日記を書き手本人が読み進んで行くという「朗読」を主体として、生の演奏と歌、音響効果と照明効果、そして役者としての動きやセリフがいくつにも重なったバイタリティ―あふれる上演でした。私としてはこの作品は今までテレビ（２００１年読売テレビ制作）でも映画でも（２００４年韓国にて映画化）見たことがありませんでしたので、見終わったあとで図書館から岡本貴也作・朗読劇「私の頭の中の消しゴム」を借りて読んでみましたが、今回上演された作品同様感銘を受けました。

特に上演作品の中で２ヶ所感銘を受けたところをあげるとすれば、ひとつめは、若年性アルツハイマーという病気にかかってしまった女性の主人公（妻）が言っている言葉で作品のタイトルにもなっている「私の頭の中の消しゴム」がでてくるシーンで、「私の頭の中には、消しゴムがあるの。覚えていることも、これから覚えることも、全部消えてくの。だからもう優しくしないでどうせ忘れるんだから」。それに対して男性の主人公である夫が「大丈夫だ。俺が、俺が君の記憶になる。俺が全部覚える」。と言っているシーンでした。ふたつめは最後のほうで夫がこう言っているシーンでした。「俺は君を愛してる。愛し続ける。たとえ君が、俺のことを忘れても」と。なかなか言えませんよね、人間の愛ってすばらしいですね。そしてそれを伝えてくれたベアーフットシアターさんにもお礼をいいたいと思います。

さて話はもどりますが、私なりに感じた残念なところも一点ありました。それは舞台下に照明がはねかえってしまいそれがまぶしかった点でした、それを防止する手立てをとっておかれたらもっと良かったのではないかと思いました。お疲れ様でした。

劇団蒼い群　村田 次郎

神奈川県演劇連盟加盟団体（５０音順）

●H&Bシアター●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
●劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●劇団やぶさか●劇団横綱チュチュ●劇団よこはま壱座●風雲かぼちゃの馬車
●まりこ☆みゅーじあむ●ミュージカルプロジェクト●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟ＨＰ：http://kenenren.org/

ＤＲＡＭＡかながわ[別冊３号]　発行日:２０１４年４月３０日　発行：神奈川県演劇連盟
編集：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）・浅水真子（劇団やぶさか）・海老名信吾（劇団よこはま壱座）・関口素実・山元洋一（外部協力）